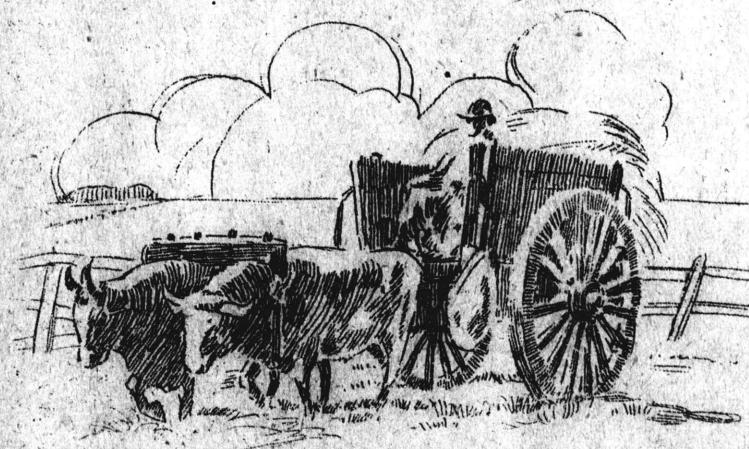


亞 尔 焉 丁 時 報

文 藝 附 錄

卷五  
第廿二號

卷五  
第廿二號



FEB. 1

de  
1930

SUPLEMENTO LITERARIO

AÑO V

Núm. XXXII

"El Argentino Dijo"

## 小説 流浪

狂自生

力つ下二の時計は最早や十二時を過ぎてゐる。一としきり騒ぎしい大アルケスターの雜音が終ると、客は次第に帰り出した。「トトイの夜は静かである。」スの中種にある小さな町トトイの夜は静かである。外路と駆せる素見帰りのガウチョ達の蹄の音も極く稀にかつて硝子戸に当る冷たい风が寒さと淋しさを誘ふてまた寂寥が新しく押し寄せてくる。七月の寒空には青白い星が氣味悪く光つてゐる。

あア星が落ちた——流れだ——何處へ——感懶深がさうに星の方に目を落した綠島は、半かば無意識に冷たくなったコヒーを飲み干して深い沈黙に入るのであつた。

面長ぶ顔と、陥い鼻は、ともすれば不均衡になり易い東洋の顔によく調和して、どこか緊張した男性美が淡い懐燈の光りに、反つて哀愁を添へてゐる。客は殆んど帰つて仕事つて今居る者はヴィクトリア横で伊太利語と西班牙語の混同で、盛んに熱と揚ひてゐる。へれけに酔いつぶつた伊太利人と、今度入つて来た四五人の夜遊び帰りの若者達とだけである。

もう可成り遅い。モソンは眼をさうにアーチと欠伸した。夕外には雪が降るのが、冷い風が吹いてゐる。——七月の南部アルヘンチーナの田舎は、住んだ人のみ知る一種競い寒さと、言ひ知れぬ寂寥が人の魂に喰ひ入つて来るものである。それは印度北海道の農村で、冬季孤独にすゞす——様子らしい氣持である。

耐へ難い憂鬱を忘れる爲めに、遙かの母國を出立してから

草坡の夢に四年はすぎた。實際綠島に之つては、生のものは一つの鉛毒としか思へなかつた。彼は更生への道を見出すべく五十日の航海とあの薄暗い三等船室のベッドでどれ程考へた事か？

甲板の上では何時も大勢のラジル行きの移民達ら、つて耕地の話いや、金儲けの話で何時も賑いで居た。早く咸金に貯めて日本に錦を飾りたいと言ふものや、アマゾンの大地上にがつて故郷の村長さんを慕がすなど、かくしてゐる無邪氣な人達の顔を見る時、綠島は何時もより少く悔のふ自己を見出しきつてゐた。

「何故？」俺は皆の様に愉快になれふいだらう——が、希望が満いで来ないのだらうが、またどうしてあの日本へ、の事か？——が、皆の希望に満ちて、嬉しい航海を續けてゐるのに何故俺一人が陰謀で企んでゐるかの様に暗い愁ひが去らぶのか！——うして明るい氣持にまれるのだらう——が、

「何時も暗い顔をしてゐるのであつた。」

船はシンガポールに着いた。熱国的情緒、月夜に梅子の葉隠されとなるベラセイロン島の釋迦の古蹟や珍奇なココンボの風習なども、今彼には何の思ひ出にもならなかつた。今日から愈々大西洋横断と云ふ南アフリカクルーケー。タウン、出发時の思ひ出のみが、今彼の頭に残つてゐるのである。それは南アの毎日に刺激された憤怒でもなかつた。また天然の美景、ケープタウンの砂丘に——大陸を齎れんとする者の味う陸の誘惑を感じたのもなかつた。

船の上のサントスに着けば、もう毎朝彼女と云へるが、  
ある彼女？ 彼れは緑島が戻ったことを抱いて独り淋しく朝  
の甲板を歩いてゐる時ふとよくハイネの詩集を手にした。  
彼女は仲よく散歩してくれたのであつた。  
此紀の乱れ勝ちが移民船の中でも二人は清く美しい四十  
日の友であつた。而しもう後十日余りで永々？ 一の別れと  
するであらう。——どうして又、より以上の孤独と味はねは  
ばらぬのであるかと思へば、彼には出帆当日のケーブタウンが  
一番悲しい思い出であつた。  
女子……彼女……珊瑚園……そして俺の極まりなき流浪の旅  
！ 彼の頭は走馬燈の様にぐるぐる廻つた。思ひ悩んで、アーヴィングの  
日程は、ヘットより起きられふがつたのと、悲しき追憶の一つに  
數へてゐるのであつた。心配して朝晩見舞に来てくれた彼  
女も悲しきつたのが、見せじとする顔には涙さへ流れくる  
のであつた。

リオデジャネイロで移民達が島の移民收容所に上陸した  
後、船上では、たつた一晩だつたが、この泊港しかつたが、その  
時の緑島の胸中は、千度寡婦が独り子と筆はれた時の氣  
持とも言ほうが、收容所からボートにひかれて本船に乗りつて来た時、彼女を  
人目も忘れて大勢の人前で抱擁した時の感激！ 而しそれは別  
その夜、彼は甲板で初めての接吻！ 嘆く！ 而しそれは別  
れるもの、哀れむ果敢ふい紀念である！ 何であつたらう！

愈々船はサントスに着いた。時が来た。  
緑島は人一倍淋しがつた。名残は惜しい五十年の友！  
珊瑚園への旅立ち！ 緑島も小さな荷物と持つて駆まで  
送つて行つたのである。愉快な移民度！ 淋しい寂寞！  
彼女等の珊瑚園の勞働や色々の事を想像して、歩む緑島  
は言葉一つ出づつた。

緑島さん、恋ははづくものねエ、御手紙を下ろし……

御丈夫でねエ、  
恋！ と云ふ言葉を聞いた緑島はハッとした。  
五十日の友、愛着、お、そうだ、恋でよくて何んであらう？  
京都府立高女卒業同僚に家族と共に海賈の契約移民  
となりて来たのですと云ふ彼女は、緑島に可なり蓮香が筆  
蹟で耕地の定名を書いて渡したのであつた。  
サンズで渡下りに別れた緑島が、船に帰った時の悲哀を誰  
が知らう。されど、彼は、その頃の緑島のデカタ  
生活を攻撃する事は余りにも惨憺であると思つてゐた。  
緑島は無意識にカツ卫を飲むと、新らしく注文した。  
あとは沈黙の夢が彼を包む。  
……日本に於ける恋の惨敗！ 船中に於ける悲しレエ  
ピートなどを知つてゐる秀夫には、その頃の緑島のデカタ  
のである。

## 二

秀夫が緑島を知つたのは、一昨年の秋であつた。  
秀夫とても渡航してから未だ三年にしかからない。  
上陸後すぐに牧場のペナンとして雇はれた彼は、松村秀夫  
も日本の農学校卒業位の技術では、何にもする事はなか  
つた。牧場の仕事は極く單調で、草刈りや馬鹿ハ牛集め  
位のみであった。

ベンブの樹下で、テを飲む気分も、生活の單調より来る倦怠  
に勝てなかつた。日本時代より可成り刺激的、強烈な都會生  
活に慣れてゐた彼は、何時まであの絶景が牧場に足り  
止めさせやう……遂に半歳やそこらの牧場生活で彼は

エヌアイレスに舞ひ度つて來たのであつた。

(つづく)

## ハニエロの行衛 左の手作

「どう／＼松木の奴を殺つけちやつた  
芝居の大詫と見事にやり終つた後者の様に軽い興奮と  
賞えがさう勝誇は微笑した。それは其夜の終ての出来事と  
知つてゐるや三者を見たから、極度戰慄しきで居られたが、  
殺へと立派と犯しあがら、そこには何等の悔恨も何等の恐怖も、寧ろ悪魔の歡喜に似た恐ろしい微笑——  
それでみて冰の様に冷い微笑——いや恐らく何事も知らぬ通りざりの人ザ見ても悚え上りはしふりつたらうか？  
されば、どんよりと墨つて、いやにじめ／＼した惹し署い殺だ。  
ごこの大時計が、真夜中の一時を打つ。  
「アーニゲー時計か？丁度よい。總てダよく運んだ。總てガ  
計画通りうまくいった。もう松木もおさうはよ。  
古くから親友と裏切？俺の可哀想がネリダと奪ひと  
りしがも——少しも嗜みつぶした葡萄のつすがぶんりの様に簡單に女を吐き捨てつちまやづった。だが、あいつも往生きわのわるい奴よ。断末魔にまだ生きやうと、たうち廻つて腕を苦しんだあいつの血みどろが頬に——ウフ。——ネリダ、手前の敵は俺がとつてやつたせ

この暑さに眠りがねて、夜の街を散歩する人達は不思議に置く様ふへおはやうふいし筋書き通り警察は五里夢中相に彼の顔を見がへつて行く。然し勝誇は、そんふ事には委綱さまはす、下度將棋のをりしかも、勝誇は腰をかぶりエンテス街に曲りふざら、醜く顔を歪めて傍若無人に笑つた。  
この暑さに眠りがねて、夜の街を散歩する人達は不思議に置く様ふへおはやうふいし筋書き通り警察は五里夢中相に彼の顔を見がへつて行く。然し勝誇は、そんふ事には委綱さまはす、下度將棋のをりしかも、勝誇は腰をかぶりエンテス街に曲りふざら、醜く顔を歪めて傍若無人に笑つた。  
完全無缺の大傑作と今一度ゆづくり思ひ起しおがらに、汗と拭くべく右のボルシージヨに手を入れた。  
「アーニツ、軽い叫びが、彼の口から漏れると同時に今度は立ち落した事、ボルシージヨに手を入れた、續いて上衣——そしてありとあらゆるボルシージヨは探された。  
「アツ、確かに持つて来た筈のハニエロは無い。  
若し落してしまつたとすれば、——ア、あの松木の屍体の横で空いた時だ。高中生も、もう絶てが終つた。あのハニエロには俺の名前だ。はつきり縛つてあるんだ。何へど六つとも逃れられふいた。  
もう駄目だ。ハニエロを持つて来て来た事が事実であり、落した事、ハニエロを持つて来て来た事が事実であり、

——と勝誇はぎんなり立止つて、あたりを見廻したが、やがて馬鹿か。しつかりしろよウフ——  
敗れこわが身を叱る様に叫んで薄気味悪く笑つた。  
町は相變らず人々一人立ちふい静けさである。

「アツ、確かに持つて来た筈のハニエロは無い。  
若し落してしまつたとすれば、——ア、あの松木の屍体の横で空いた時だ。高中生も、もう絶てが終つた。あのハニエロには俺の名前だ。はつきり縛つてあるんだ。何へど六つとも逃れられふいた。  
もう駄目だ。ハニエロを持つて来て来た事が事実であり、落した事、ハニエロを持つて来て来た事が事実であり、

事が何にある……

いた。巡査、あせればあせる程、鍵があやぶい。

今迄、あれ程冷靜に落ちついてゐた勝弥の頭は根柢からひ  
づくりがへられた。惡魔の様に圓々しがつた彼は、今や泥棒捕  
の如くにおひえねはあらふかつた。

一步一步大地踏みしめる様にして歩いてゐた彼の足は、ま  
るで酔っぱらひの様に宙に踊つて、眼がぶヨリエンヌ街やら、  
パラナ街へ折れた。とも町の驛ヶヤゲ彼に耐えられかねな  
所だら。

明時の夕方まで、屍体が絶対に見付かる筈がないと確信し  
てゐたのさへどうやら危くなつて來た。もう非常線が張ら  
れてゐるかもれない。

心ふしが、直行く人——いや、それはかりじやない——街角の  
巡回まで、彼を見つめて居る。

勝弥の頭はもう全く混乱してしまつた。

彼は、つかまへられかね、うちに下宿まで帰らう——と唯一  
胸にあせりながら、何處をどう曲つたのが、何丁歩いたのか  
も判らぬ無残夢中で道を失つてゐた。

下宿へ着くまでに、備まるがもしれない。もうじよく駄目だ。

さう思ひながら、彼の眼は或ち町角の巡回の眼と、かく出会い  
つた時、巡回はぢ一つと彼を横視してゐた。——やがて、何  
が云ひあがら被の方へ此寄つて來た。

もう手がまつてゐる。さう考へた彼の足は、治んど無意識

のうちに町角を右へ曲つて走つてゐた。

宿まで、あと二三步だ。惡魔は追はれた様に彼の足は早  
速り出した。この場合、暑さなんか考へてゐる乎猶ふんか

彼には全くがつた。もうすぐそこ下宿だ。

然し、その四ツ角にも又巡回が立つてゐる。

見知り起しの巡回ではあつたが、今夜は特にむづがしい顔

をして彼の方へよつて来た。そして何かを尋ねた。

「幾ツ未だ帰まるもんか。」

巡回——彼は振り切る様に、駆け抜けて、下宿の入口へ駆りつ

て、あのハボネスは酔拂つてたのでせう。パンタロンの下さら。

巡回の手が、若んで彼の肩にかけ、さうすこ聲に囁はれてあ  
せり、抜いた揚げ、やつと開いた戸口から、暖房の如くに二階の  
部屋へ駆け上つた彼は、やつたりとカマに倒れ伏した。

あれだけ熟考に熟考を重ねて計画を立てたのに、ほんの

一瞬、不注意から、たゞ一歩のミエロから、

破綻が来やうとは……。

長い間の怨みをやつと今後復讐しないふ願喜もつが間

人生五十年とした所で、未だこの先廿四年といふ一生を棒に

振つた事をあきらめ葉ゆく彼は、倒れた。

「ジージジ——」

突如——真夜中の静寂と底がら空虚る様に、フレルタの呼鐘

が家中へ響き渡つた。

強機仕掛けの様に飛び上つた勝弥は、窓から街路を見下す

と、案の定、淡い街燈に照らされた巡回の姿。

「もう駄目だ。」

彼の眼前には、走馬燈の様に、未だ見ぬ荒廢たるティエラ・

デ・フェゴの終身监狱が展開された。

「ア、終て終つた。」

絶望的お嘆きが喘息と共に彼の唇から飛たて後、一度一分

不精無精下宿のセミーラが、玄関口に下りて行つた。

頃一発の銃声が再び静寂の闇を破つて、室内をふるはせた。

巡回にこぼしてゐた。

巡回は巡回で

一度その時、戸口では瘦半の二脚にブルタガ開いたまま、  
なつてゐたのを巡回から注意されたセミーラは、今しがた  
あけつはふしたま、二階に上つた勝弥の不注意をブツクサ  
巡回にこぼしてゐた。

巡回は巡回で

「あのハボネスは酔拂つてたのでせう。パンタロンの下さら。

白いものを引き、びりながら、町を走って来て私をそれを見

注意してやつたのに医事もすこに家中へ飛び込んでしまつたんですね、からね、セニョーラ。

若い者には夜遊び、夜遊びには酒がつかものですから、

ハ……

と、とりがし顔にニヤニヤ、人の善い微笑を浮べながら話す

瞬間、例のズドーンと一聲である。

泡を喰つた二人はしきなり階段に駆け上つて、恐ろしく及ぶ

腰で勝手の部屋をのぞくと、彼が絵に染んで例れてゐる。

キヤーッと叫んでセニョーラは逃げ出す。

職業病、登はそろく部屋の中に入る、屍体の右足に

パンタロンのボルシージョグ縫ひ落ちたらしく、パニエログ、

靴に引つが、つた儘、いやに自分で彼の眼を射た。しかもその

片隅に勝手の名前が縫ひこりしてあるのだけはつかりと

こりや醉はらひじやなくて、可哀想に気が狂つたのじや

わく

善良ふ巡査は、そう考へた。

(あわり)

## 夜のマル・デル・プラメ

黒潮

さびれた黄色い月が、真黒ぶ東の空に押し上げられる、暗にうねつて波の姿がくすんだ病的の影を映し出していく。碌づたいの處の燈りがほのかある月の明かりで来た。さにほがされるあたり、おぼろげふ物象の形が浮んでゐる。木の家も陸も及て、無輪廓、あくまでも、それらが寂寥な旅心地の彼に一種の詩的ふ渋ぐましさを誇る。

足下に重々しい力強さで、おしゃせては返す波のゆるやかある。

鼓動は、あへがふる過去の色々ふ思ひ出を誇る交響曲である。

三十に手のとどいた老青年の彼はもう、表面的ふ美しさや落實とした幻影の華にひたる時代ではなかつた。人生を活の真まつたんですね、からね、セニョーラ。

隨にふれで利己的ふ根づよい人生觀が、愁いの諦めなど、なんや若い者には夜遊び、夜遊びには酒がつかものですから、

ハ……

と、とりがし顔にニヤニヤ、人の善い微笑を浮べながら話す

瞬間、例のズドーンと一聲である。

泡を喰つた二人はしきなり階段に駆け上つて、恐ろしく及ぶ

腰で勝手の部屋をのぞくと、彼が絵に染んで例れてゐる。

キヤーッと叫んでセニョーラは逃げ出す。

職業病、登はそろく部屋の中に入る、屍体の右足に

パンタロンのボルシージョグ縫ひ落ちたらしく、パニエログ、

靴に引つが、つた儘、いやに自分で彼の眼を射た。しかもその

片隅に勝手の名前が縫ひこりしてあるのだけはつかりと

こりや醉はらひじやなくて、可哀想に気が狂つたのじや

わく

善良ふ巡査は、そう考へた。

(あわり)

されば唯無感覚で人生、三十にして立つ

妻もあり、子もあり

人間のふむべき習慣は

被と人として形づくつたが

本態と自然とあやつられた人形である

ほうばくとした海の彼方に

幸ありと思ひし人生の旅人よ

砂浜に残す足跡の様子

嘻び泣き笑い怒り、

暗に光る不知火の様子

はがふい生命のやぐ動をつけてゐるのだ。

詩

## 朝の憂鬱

丘谷啓一郎

王城の様に、  
クツキリと画されられた。  
白壁の家。  
銀色に  
ギラギラと美しい  
幻色とはぶつ  
風車。

其れは俺の夢の中の有様。  
葡萄烟は  
黒マト地とはか  
一房のその実は  
人間の血をすつて赤くなる。  
其の薄い皮の向ふに  
樂しい生のいとなみ。  
行はれてゐるだらうに。  
何んど血をすつて生活するもの  
樂しかふ事よ。

クネクネと  
煉瓦でつくられた  
階段とのかる時  
一本のしわと打込む  
泥湯はひろがつた  
彼は俺の妻に、  
さばしだ。彼の方にはひろがつた

俺の嫌ふ蚊をつくる  
此のけれど、  
カツカラと空虚のみ、笑を喫へる。  
教風景が  
パンの彼方に  
陽の照りどまる時だけでも  
少しば俺の心をなくさめて愛し。  
朝まだきは  
草も樹も  
横たふ牛の聲も

一種に  
異怪ふ文字を悉くさずがら  
何凧の旗の様に  
赤々と燃えたつ。  
雀はまだ  
横たふ牛の聲も

一種に  
鳴か無いと云ふに。  
俺達の生活は  
また繰りかへられて行くのみ  
あへざりながら  
只だ  
腐つたパンの様ふ  
死の恐怖と  
苦へられふじはぎりに  
苔ぐさに一升もの  
憂鬱な朝。

一九三〇・一六

詩、夜半の祈 伏舟

高慢

小鳥の如く疵つちし吾<sup>ガ</sup>魂は  
未だ癒えず一飫に三日

そぞろに夜のアラサを独り歩む

星疎らに人稀れに  
夜露身に祕みて淋し

ア、愛と謙遜に  
生きんとする身

人生何を禍多き！

うぶだれで直世と想ひ  
仰ぎて奮闘を叫ぶ

右左すべさか  
將た左すべさか  
わざ心迷へり  
大、神♪

「わが心弱し  
頼くば強き力を與へ給へ」

静に目を開けば  
星斗また、きて人影ふく

更夜はしんと  
けて行く。

一九三〇・一・二七

Yと話して心滿りぬ大空に向ひて  
清々大氣を吸はむ。

體物にさわるが如く高慢の心みつ  
Yと別れけり。

Yと語りて家に歸れば部屋ぬちは  
思つまるらしこ掃除せむ。

Yと語りし後の不快に垢つきし  
思抱きてひねもす暮す。

夫りたる声もわかれの胸をさす  
君はまことに毛虫の如し。

夜のアラサと靜に歩みしみ  
嘲ある人を思ふ悲しみ。

口語詩 生きて居る間は 北岡健

一九三〇・一・二七

歌 なやみ 伏舟

高慢ふ友と詰じて濁り水呑みしゲ  
如くもかつわか胸・

ゲ

生きてゐる間は  
虚偽を吐いたら  
欠伸を放したり  
空咳を涙したり  
虚榮をはつたり  
ごへふ後<sup>ハ</sup>ゲ、人間は  
演ずる道<sup>ハ</sup>ラン  
者です。

一九三〇・一・二七